

博士論文要旨

論文題名：質的研究法 TEA の新たな理論的展開と キャリア領域における実装可能性

立命館大学大学院人間科学研究科
人間科学専攻博士課程後期課程
ミヤシタ タイヨウ
宮下 太陽

本研究の主題は、記号論的文化心理学に考え方に基づく質的研究法 TEA (Trajectory Equifinality Approach: 複線径路等至性アプローチ) の理論的発展及び、キャリア領域における社会実装の可能性の追求である。本論文は3部構成であり、7章からなる。

第1部「理論編 記号論的文化心理学としての TEA の発展可能性」では、記号論的文化心理学の手法である TEA とその具体的分析手法としての TEM (複線径路等至性モデリング)、TLMG (発生の三層モデル) に焦点をあて、それらの発展可能性について検討した。

第1章では、記号論的文化心理学に立脚した方法論である TEA において記号をどのように概念化しどのように理解すればよいか、という問題意識のもと、よりふさわしい記号概念を構築することを目指した。パースの記号論を足掛かりに、ヴィゴツキーの三角形、ヴァルシナーの促進的記号について論じていく中で、三者の記号概念の統合的概念図である記号の三角錐 (sign triangular pyramid) を記号論的文化心理学における記号概念の基本単位として提示した。

第2章では、TEM における記号概念をどのように精緻化させ、TEM の中で人と記号の相互作用過程をどのように記述することが、より TEM を豊饒化することにつながるのかを明らかにすることを目指した。ロトマンの記号圏、ジトウンのイマジネーション理論を手掛かりに、TEM のイマジネーションモデルを提示し、記号圏を規定する「包括体系的セッティング」と「記号的プロトコル」に研究者が自覚的になることの重要性を指摘した。

第3章では、TEA において分岐点を捉える方法論として用意されている TLMG に焦点をあて、ヴァルシナーの内化・外化、ユクスキュルの環世界といった TLMG へと至る理論的系譜を整理した。その上で、中動態の概念を手掛かりに TLMG の理論的拡張を目指し、TLMG の分析において、インタビューデータの中動態的ゆれうごきに注目することの重要性と有効性

を示した。

第2部「キャリア領域における個人の発達と変容へのTEAの実装」では、「プロとしてキャリア転換」した経験を持つ方をHSI（歴史的構造化ご招待）により研究協力者としてご招待し、キャリア領域におけるTEAの実践研究を行った。

第4章では、個人のキャリアの多様化に焦点を充て、組織の中で十分に役割を果たしている個人が、組織を離れて新たなキャリアを選択する際のプロセスを明らかにすることを目指した。まずHSIにより、プロとしてキャリア転換した経験を持つ8名の方を研究協力者としてご招待し、1人につき3回インタビューを行った。その上で、TEMによる分析を行い、「プロとしてキャリア転換する」等至点に至る径路には大きく4つの段階（1期：受動的メンバー期、2期：能動的メンバー期、3期：能動的プロ期、4期：自立プロ期）があることを見出した。また、等至点に至る径路が選択されるまでには、3期「能動的プロ期」から4期「自立プロ期」への移行の間にある分岐ゾーンが重要であることを明らかにした。

第5章では、第4章と同じ8名の研究協力者のデータを活用し、3期「能動的プロ期」から4期「自立プロ期」への移行の間にある分岐ゾーンにおける価値変容に焦点をあて、変容と発生を捉えるTLMGを用いて能動的プロ期から自立プロ期への移行期に、どのような変容が生じているのかについて理解を深めることを目指した。TLMGとイメージネーション理論による統合的な分析を通して、能動的プロ期から自立プロ期へ移行する分岐ゾーンにおいては、まず発生の促進的記号の発生が基点（トリガー）となり、SD・SGがEFPへと至る選択をする上でのリソースとして働き、最終的な選択（アウトカム）を導いているありようが確認された。また分岐ゾーンが収束に向かう際には、収束の促進的記号が重要な働きをしていることを明らかにした。

第6章では、キャリアの経年的変化を経過観察するため、第4章、第5章において分析対象とした8名の方のうち、その後新たなキャリアを選択した方1名にインタビューを行った。個人TEM図を描くことで、自立プロ期に到達した方が、新たなキャリアチェンジを行う際に、どのように選択を行っているのか、またそこではどのようなことがキャリアチェンジを行うという選択に影響しているのかについて理解を深めることを目指した。キャリア形成においては、未来展望としてのありたい姿・思いを基点にして、バックキャスト的な思考プロセスにより、分岐点の各ポイントで本人の時間展望が径路選択にとって重要な要因になっていることを明らかにした。

第3部の第7章「総合考察」では、第1部の理論研究、第2部の実践研究で得られた知見を踏まえ、質的研究法TEAの発展可能性及びキャリア領域での実装のあり方について総括し、本研究の課題や限界、展望について考察した。

今後は量的研究との混合研究も視野に、さまざまなキャリアにおける経験の多様さや径路の類型化を目指しながら、キャリア形成プロセスを多角的に明らかにしていく必要がある。